

自己調整学習を主題とする授業における 受講者の学習に関するメタ認知的な気づきの分析

Analysis on Learners' Metacognitive Awareness on Their Learning Process in a Lesson on the Subject of Self-regulated Learning

仲林 清^{*1}Kiyoshi NAKABAYASHI^{*1}^{*1}千葉工業大学 情報科学部^{*1} Faculty of Information and Computer Science, Chiba Institute of Technology

Email: knaka@net.it-chiba.ac.jp

あらまし：自己調整学習の概念や方略を、学習者が意識して活用することを促進するための授業実践を行った。大学1年生の学生を対象に、学習理論や自己調整学習に関する知識を与えたのち、これらの理論の観点から、中学生の学習の様子を描いたドキュメンタリービデオを視聴させた。その後、自らの学習経験とビデオの内容を対比したレポートを提出させた。授業後に学習に対する意識変化に関する自由記述を行わせ、内容に含まれるメタ認知的な気づきの分析を行った。

キーワード：自己調整学習、ドキュメンタリービデオ、学び方の学習、既有知識の活用

1. はじめに

自律的に学び続ける能力が、社会の急速な変化に対応するために重要となっており、“Learning to Learn and Metacognition”が21世紀型スキルの中にも位置付けられている⁽¹⁾。本稿では、大学生を対象に、自らの学習経験を自己調整学習⁽²⁾などの学習に関する学術的・体系的知識と結びつけて内省・概念化させ、以後の学習活動におけるメタ認知や学習方略の活用を意図した授業実践について述べる⁽³⁾。

2. 学習主題

授業では、自己調整学習⁽²⁾を中心に学習理論や学習の動機づけを取り上げた。自己調整とは、教育目標の達成を目指して学習者が自ら作り出す思考・感情・行為であり、学習過程において、自身のメタ認知・動機付け・行動に能動的に関与することを自己調整と呼ぶ。特に、自己調整学習方略・自己効力感・目標への関与が重要とされている。自己調整学習は、予見段階、遂行段階、自己内省段階からなる個人的フィードバック・ループとしてモデル化される。本授業実践では、以下を具体的な学習主題とした⁽³⁾。

- (1) 予見段階での目標設定・動機付け・自己効力感
- (2) 遂行過程のセルフ・モニタリング
- (3) 自己内省段階における自己評価や原因帰属、それによる適応的／防衛的反応
- (4) 自己調整学習を促進するための教師の介入

3. 授業設計

授業対象の大学生は、メタ認知や自己調整学習の能力を誰もが身につけているわけではないが、小中等の学習者に比べれば、前節に示した学術的・体系的知識を理解するのに十分な知的水準を有していると仮定できる。また、学習過程に関する経験があり、経験を客観的に振り返る能力も有していると期待で

きる。そこで、これらの学術的・体系的知識と学習者自身の経験・既有知識とを結びつけさせて内省・概念化を促進する。

前章の学習主題は、かなり複雑な内容であり、知識付与型の学習手法では、学習者の興味を引き出すことが難しい。そこで、筆者が組織における問題解決などの学習に適用して効果を確認したドキュメンタリービデオとオンラインレポート提出を組み合わせた授業設計の枠組み⁽⁴⁾を適用する。この枠組みを図1に示す。学習の主題に即したドキュメンタリービデオを視聴させ、これに関するレポートを課す。次の授業直前までにレポートをオンラインで集約して授業で配布し、教員が内容を適宜紹介する。これを必要に応じて繰り返す。

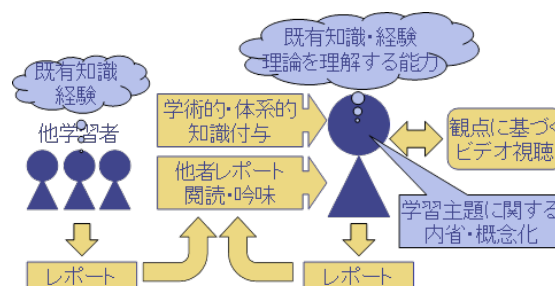


図1 授業設計の枠組み

本授業では2本のビデオを使用した。うち1本は、NHKの「あしたをつかめ」というシリーズの「#33 塾講師」（以下、塾講師）である。女子中学生、塾講師、講師の上司が主な登場人物である。中学生は数学が苦手で成績が伸びずやる気を失っている。講師との面談では「周りが天才だから」と発言する。講師は、努力すれば成績が伸びることを伝えたいと上司に相談し、自発的に勉強させる施策が大事だ、とアドバ

イスを得る。講師は自習ノートを生徒に渡し、科目を自分で選んで目標を決めて自習するように告げる。生徒は、科目を数学に決め、「その日間違ったところを復習する」という目標を定める。この結果、次回の小テストに1回で合格する

上記の生徒の言動は、自己調整学習の観点から以下のように解釈できる。生徒は、数学に苦手意識があり、自己効力感がない。「周りが天才だから」という発言から、成績の悪さを能力に原因帰属していることがうかがえる。また、間違えたところを振り返ることもしておらず、防衛的な感情が出ていて、適応的な決定ができていない。それに対して講師は、適応的な決定を促すために、自習する科目・目標を自分で決めるように告げて、予見段階における目標設定を促し、また自習ノートによる努力の可視化の仕組みを作っている。これに対して生徒は、「数学でその日間違ったところを復習する」という近時的で具体的な学習目標を自分で決め、この結果、小テストに合格し、プラスの感情を得ることができた。

授業では、1 コマ目に学習方略に関するビデオと解説、2 コマ目、3 コマ目に「塾講師」のビデオを視聴させて、授業内で適宜解説した自己調整学習理論の観点からレポートを提出させた。「塾講師」のビデオは理論を解説した教材ではないので、学習者は、理論、自身の経験、他学習者のレポートを能動的に結び付けて考察し、レポートを提出する必要がある。

4. 評価

2016年の前期に授業を実施した。調査対象者は情報系学科の1年生103名である。授業後に授業内容、および、学習意識変化に関するアンケートを行った。

表1 学習意識変化の記述例

抽象的 ○学び方によって身につく度合いの違いが理解できた ●これまでの学習スタイルについてどこが良いのか悪いのかを改めて認識しました。
抽象的自己調整 ○意味を考えないで行った勉強にはほとんど意味がないということを知った。 ●学ぶという意味を理解する。やればできるという暗記的な学び方ではダメだ。内容ややり方を覚えてこそ学びは発展するという考えが深まった。
基礎 ○テストの解答があっているかどうか確認するだけでなく、解説をしっかりと理解することの大切さがよくわかった。 ●今まではできたことに満足していたが、ビデオを見てからできなかったことに関して対策を考えることが重要だと考えるようになった。
自己調整 ●自分の動機付けがどれくらい勉強に影響を及ぼすのか理解したので、今後勉強をする教科には自分なりの動機を考えて学習したいと思います。

○：メタ認知的内容なし、●：メタ認知的内容あり

学習意識変化の記述例を表1に示す。記述内容をカテゴリー⁽⁴⁾に分け、さらにメタ認知的な内容が含まれるか否かで分類した⁽³⁾。判断の基準は、自身の過去の思考に関するモニタリングや、今後の行動に関するコントロールの有無に依った。

メタ認知的記述をした群としなかった群で、授業内容アンケートの比較を行った。結果を表2に示す。全体的に、7件法で5以上の高い評価になっているが、特に、記述有りの群の方が全般的に高い評価を与えていることがわかる。記述無しの群は、「内容は役に立った」、「今後の大学での学習を進めるうえで参考になった」などが特に低い値となっている。また、「このような内容を今後も学んでみたい」は両群とも低い値となった。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 26560127 の助成を受けた。

参考文献

- (1) P.グリフィン, 他 (編), 三宅なほみ, 他 (監訳): “21世紀型スキル: 学びと評価の新たなカタチ”, 北大路書房 (2014)
- (2) Schunk, D. H. and Zimmerman, B. J.: “Self-Regulated Learning: From Teaching to Self-Reflective Practice”, Guilford Press (1998)
- (3) 仲林 清: “自己調整学習を主題とする授業実践における受講者の学習に関する意識変化”, 教育システム情報学会研究報告, 31(6), pp.167-172 (2017)
- (4) 仲林 清: “組織における問題解決を主題とする ビデオとオンラインレポートを活用した授業実践”, 教育システム情報学会誌, Vol.32, No.2, pp.171-185 (2015)
- (5) 伊藤崇達: “自己調整学習の成立過程”, 北大路書房 (2009)

表2 授業内容評価の比較 (7件法, 103名)

質問	平均 (標準偏差)		有意差
	メタ認知記述なし 38名	あり 65名	
内容は理解できた	5.42 (0.95)	5.82 (0.75)	*
内容は役に立った	5.11 (0.98)	5.71 (1.01)	**
内容に納得した	5.26 (0.95)	5.63 (0.86)	*
自分の経験と結びついた	5.29 (1.01)	5.60 (0.86)	n.s.
このような内容を今後も学んでみたい	4.68 (1.21)	4.94 (0.95)	n.s.
今後の大学での学習を進めるうえで参考になった	4.82 (1.27)	5.25 (1.02)	+
社会に出てからもこのような考え方は参考になると思った	5.30 (1.09)	5.54 (1.02)	n.s.
「学び方」に関する考え方が深まった	5.18 (1.16)	5.50 (0.81)	n.s.
「学び方」に関する考え方が変わった	4.82 (1.29)	5.15 (1.09)	n.s.